

青 山

国際政経論集

津田眞澄教授退任記念号
第32号



AOYAMA KOKUSAI SEIKI RONSHU
(The Aoyama Journal of International Politics, Economics and Business)

AOYAMA GAKUIN DAIGAKU KOKUSAI SEIJI KEIZAI GAKU
(Aoyama Gakuin University Society of International Politics, Economics and Business)
4-4-25 SHIBUYA, SHIBUYA-KU, TOKYO, JAPAN



津田眞澄教授近影

CONTENTS

Words of Praise for Professor Masumi Tsuda	Shoichi Naito... (1)
In Appreciation of Professor Masumi Tsuda	Fumio Itoh... (3)
Professor Masumi Tsuda: His Personal History	(7)

— ARTICLES —

The Distress of Unemployment in Okinawa	Shigemi Honda... (11)
The Bond Market Efficiency and The Data Envelopment Analysis	Hiroshi Takamori
	Yasushi Shimizu... (33)
The Future of Japanese Management from a Communication Perspective	Kichiro Hayashi... (49)
Statements of Variances between Budget and Actual at Otaru Branch of Nippon Yusen Kaisha, 1888 to 1894	Fujio Yamaguchi... (69)
An Overview of Western Environmental Philosophy-I	Richard Evanoff... (103)
A Consideration on 'Community-theory'—Especially concerning Yamagishism Community	Takeshi Yamaoka... (125)
Economics of Medical Care (An Introduction)...	Ryuichiro Tachi... (147)

— SURVEY MATERIAL —

York Corporation House Books of the Reign of James I (VI): 15 January-14 March 1603/4	Toshio Sakata... (151)
---	------------------------

津田眞澄先生を称えて

内 藤 昭 一

この度定年によりご退職になりました津田眞澄先生の本学ご在職中の多大なご貢献を顕彰して、今回の論集を「津田眞澄教授退任記念号」として刊行される運びとなりましたことを、衷心より慶賀申し上げます。

津田眞澄先生は、武蔵大学、中央大学を経て、1970年一橋大学社会学部教授にご就任、1989年3月同大学名誉教授をもって定年ご退職後、直ちに本学国際政治経済学部国際経営学科教授としてご着任になりました。その間、1982年イタリア・ミラノ国立大学経済学部客員教授、1983年オーストラリア・ブリスバース大学アジア研究学部客員教授として「日本経済論」を講じられ、また1962年「現代アメリカ労働組合の構造」により経済学博士(東京大学)を、1986年には「日本の経営の論理」によって社会学博士(一橋大学)の学位を授与されておられます。

先生は、本学ご在職中の5年間に亘り、「国際経営労務論」、「日本経営論」、「国際人事管理」等の分野におけるご講義、演習等を通して、本学の学生、院生の教育・研究指導に尽力され、誠実、真摯なご人格と相俟って、国際政治経済学部の充実、発展のために、多大のご貢献を果されましたことを心から深く感謝申し上げます。

夙に「労働問題」「労務管理」ならびに「日本的経営」等の諸分野における斯界の権威として、各方面に涉って重要な役割を果しておられますが、先生が今後共益々ご健勝で広く社会のためにご活躍、ご貢献下さいますことを願い、併せて国際政経論集および当学会の一層のご発展を祈ってご挨拶とさせていただきます。

津田眞澄教授を送る

伊 藤 文 雄

先日、この3月に本学大学院国際政治経済学研究科国際ビジネス専攻修士課程を修了した三角義明氏より一冊の本が贈られた。この本は彼の修士課程の研究成果を中心にとめたもので、「21世紀のホワイトカラーミドル」、近代文芸社から出版されたものであった。そして、この本は、実は東京都労働経済局が募集した懸賞論文に応募し、見事優秀賞に入選した論文であった。審査結果では、「バランスのとれた自分で考えたこなれた論文、テーマがタイムリーである」と評価されている。三角氏はこの懸賞論文を加筆し、「21世紀のホワイトカラーミドル」としたもので、その本書のあとがきの所で、本書が上梓されるまでの経緯を次のように述べている。

「本書の発端は、昭和56年の「人事管理の現代的課題」（津田眞澄著、税務経理協会）との出会い、さらに、青山学院大学大学院で2年半、津田教授の「国際人事論」の講義により、問題点を深く掘り下げた機会があったことである。本書のねらいは、ホワイトカラー全般の人事制度の再構築が主題である。これを解くには、あまりにも浅才であった。このため、多くの著書、論文、資料を引用、活用させていただいた。このことに深謝し、多くの指導、示唆及び文献の引用、使用を許可いただいた、津田眞澄青山学院大学教授に衷心よりお礼申し上げたい。」と、津田先生の学恩に感謝の辞が述べられている。三角氏は津田先生の授業を求めて国際ビジネス専攻に入學し、そして2年半先生の研究指導をうけ、その研究の成果がこの度の受賞となったものである。

周知の如く、国際ビジネス専攻修士課程は、1990年4月に職業人を対象とした、専ら夜間に開設された大学院である。2年後の1992年4月には昼夜開講制

とし、現在入学定員110名、220名近い学生が一つの専攻に在籍する大規模な大学院である。平均年令は32～33才で、ほとんどの学生が平日は会社の仕事を終て夜間に学び、土曜日は昼間に学び、そして学費を自ら家計のやりくりから支出しているという本当に真面目な苦学生達である。三角氏もそうした学生の一であり、津田先生の良き研究指導をうけた学生であった。

津田先生は、1989年4月、一橋大学社会学部教授の退官と同時に、本学国際政治経済学部国際経営学科教授に就任なされ、「国際人事管理」等の学科目を担当なされた。先生は、昭和27年に東京大学経済学部を卒業され、直ちに学究生活に入られ、東京大学経済学部助手、武蔵大学経済学部専任講師、助教授を経て教授になられ、中央大学経済学部教授及び一橋大学社会学部教授として、今日まで約40年以上にわたり教鞭をとられ、人事労務管理、労使関係、労働経済、日本の経営、国際労働問題などの分野を中心に、精力的な研究活動により、多数の研究業績をあげられ、学術論文の数は350点以上にも及んでいる。著書も30冊余もあり、数多くの内外学会発表等の形になって、先生のご研究の成果は、わが国を代表するものになっている。

先生の研究業績は、このような量的な膨大さにあるのみならず、内容的にも学会をリードするような高い水準を多方面で示されている。学会では多くの学会に所属され、特に日本労務学会、労使関係研究会(JIRA)、及び日本経営教育学会では理事として活躍され、米国のLabor and Industrial Research Associationでは終身会員でもある。先生のごこうした研究業績は、東京大学から経済学博士、一橋大学から社会学博士の学位が授与されたことによっても証明されている。

特に、先生の「日本の経営」に関するご研究は、一橋大学社会学博士の学位請求論文の研究テーマ「日本の経営の論理」であり、「共同生活体」論にもとづく独創的なものである。それは社会経済史についての先生の広い知識にもとづく国際比較論と、人事労務管理問題についての先生の深い理解とに支えられたもので、それだけに学問的刺激に富んだものである。独創性と同時に説得性に富んだこの研究は、関連領域での研究に大きく貢献したのもとして高い評価

をうけられている。

先生のこの分野における教育研究の指導的立場は、国内においてのみならず、米国イリノイ州立大学、イタリア・ミラノ国立大学、オーストラリア・ダリフス大学でそれぞれ客員教授として招聘され、国際的な研究教育活動に活躍された先生である。従って、本学部においても、先生に「日本の経営論」の科目の英語講義をお願いし、評判の授業ともなった。

先生のご活躍は多くの公的機関でもみられ、東京地方最低賃金審議会、東京地方家内労働審議会、中央家内労働審議会等数多くの審議会又は調査会の委員に委嘱され、特に、中央家内労働審議会では会長に任命され、わが国の労働問題にたいしても大きなお働きをなされた。

津田先生の本学部での在職期間は約5年間と僅かな期間であったが、その間学部ではいろいろな教育研究改革問題をとりあげ、上述の国際ビジネス専攻開設もその一環であり、職業人学生の修士論文作成の研究指導のあり方について貴重なご指導をいただいた。その結果、現在安定したパターンで定型的な論文審査が行なわれるようになった。一専攻で約220名の学生の研究指導をしていくことは大変であり、それだけにわが国の高等教育の一つの新しい試みに挑戦していかなければならず、先生はその良き理解者でもあられた。

津田先生は、このように本学部・研究科の研究教育活動について多大なお働きをいただいた。先生の講義・演習の授業は、学生たちに多くの感銘や多大な学問的刺激を与えたと同時に学問研究の厳しさを教えられ、先生の深遠な研究業績がそれを覚えさせたことと思う。

ここにわれわれは先生のご功績を讃えるときにも、先生の定年退職を覚えて、同僚後輩によって青山国際政経論集第32号を記念として捧げる。先生がますますご壮健でご活躍下さることを祈念申し上げます。